

熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告

平 子 達 也* ・ 五 十 嵐 陽 介**

1. 本研究の目的と本稿の概要

九州西南部（佐賀県、長崎県、熊本県、鹿児島県）の大部分では、語の長さに関わらず最大2種類のアクセント型が対立する二型アクセント体系を持つ方言が話されていることが知られている。これらの諸方言を本稿では「西南部九州二型アクセント方言」と呼ぶ。

西南部九州二型アクセント方言に関する研究は、特に長崎市方言や鹿児島市方言を対象にしたものが多かった。しかし、近年になって天草地方や種子島に分布する二型アクセント方言に関する報告が出てきている¹。西南部九州二型アクセント方言の類型論的・歴史的研究を進めていくためには、当該諸方言に関するさらなるデータの蓄積が必要である。

こうした背景に鑑みて筆者らは、2014年2月から佐賀県旧杵島郡および旧藤津郡の諸方言と熊本県玉名市方言を対象に、類別語彙²を中心としたアクセント調査を行ってきた。本稿は、それらの調査のうち熊本県玉名市方言アクセントに関する調査結果の報告として、特に1～3拍の名詞アクセント資料を提示することを主な目的とするものである。

以下、2節で本稿における用語法と表記について述べた後、3節で西南部九州二型アクセント、特に玉名市方言アクセントに関する先行研究を概観する。4節で筆者らの行った調査の概要を述べ、5節で話者間の相違にも言及しながら玉名市方言アクセントの概略を記述し、この方言のアクセントが二型アクセント体系であることを示す。6節はまとめである。

* 実践女子大学文学部国文学科助教
** 一橋大学大学院社会学研究科准教授

hirako-tatsuya@jissen.ac.jp
y.igarashi@r.hit-u.ac.jp

2. 本稿における用語法と表記について

本稿ではピッチの高低昇降を表記するにあたり、以下の表記を用いる（○は拍を表す）。ただし、便宜的に H（高平調）・L（低平調）・M（H と L の間の音調）・F（拍内下降調）を用いる場合もある。なお、名詞と助詞の境界はハイフンで示す。

(1) 本稿で用いる表記

拍間でのピッチの上昇	○[○
拍間でのピッチの下降	○]○
拍内下降	○]]

先述のように西南部九州二型アクセント方言は、語の長さに関わらず最大 2 種類のアクセント型が対立する二型アクセント体系を有している。西南部九州二型アクセントに関する先行研究では、伝統的にアクセント語類において二拍 1 類名詞と二拍 2 類名詞の大部分が所属するアクセント型を A 型、そうでないアクセント型を B 型と呼ぶ（平山 1951）。本稿でもこの用語法に従う。

A 型、B 型がそれぞれどのような音調型（ピッチパターン）で実現するかは方言ごとに異なる。例えば、鹿児島方言では A 型、B 型がそれぞれ (2) のような音調型で実現される。一方で、長崎方言の A 型と B 型はそれぞれ (3) のような音調型で実現される（木部 2000; 松浦 2014 など）。

(2) 鹿児島方言の音調型

	A 型		B 型	
一拍名詞	柄	[エ]]	絵	[エ
	柄が	[エ]-ガ	絵が	エ-]ガ
二拍名詞	歌	[ウ]タ	猿	サ[ル
	歌が	ウ[タ]-ガ	猿が	サル-]ガ
三拍名詞	煙	ケ[ム]リ	頭	アタ[マ
	煙が	ケム[リ]-ガ	頭が	アタマ-]ガ

(3) 長崎方言の音調型

	A 型		B 型	
一拍名詞	柄	[エ]]	絵	エ ³
	柄が	[エ]-ガ	絵が	エ-ガ=
二拍名詞	歌	[ウ]タ	猿	サル=
	歌が	ウ[タ]-ガ	猿が	サル-ガ=
三拍名詞	煙	ケ[ム]リ	頭	アタマ=
	煙が	ケ[ム]リ-ガ	頭が	アタマ-ガ=

上記の表の範囲で、鹿児島・長崎両方言の違いが顕著に観察されるのは三拍名詞に一拍助詞が続

いた場合である。両方言の音調型の実現を一般化すれば、鹿児島方言における A 型は「文節の後ろから二番目の音節だけが高く実現」し、B 型は「文節末の音節だけが高く実現」する。一方で、長崎方言の A 型は「語頭から数えて二番目の拍だけが高く実現」する（ただし二拍語の場合には語頭拍のみが高く実現する）⁴。

3. 先行研究

西南部九州二型アクセント方言に関する研究は、古く E. D. ポリワーノフ (1891-1938) の研究にまで遡るものであるが、その包括的な研究は平山 (1951) が最初である。平山 (1951) の第二章「九州西南部の二型音調」では、九州西南部を大きく南部地方 (鹿児島県)・中部地方 (主に熊本県)・北部 (主に佐賀県と長崎県) に分け、各地方に分布する幾つかの方言の二型アクセントを記述している。このうち本稿に関連するのは、第三節 (p.45 以降) の中部地方 (熊本県下を中心とする) の諸方言のアクセントに関する記述である。特に p.63 以下の「(五) 玉名音調 (熊本県北部)」で扱われている方言は、一部本稿で対象とする方言とも重なる。筆者らの調査に協力していただいた話者のうち一名は、平山が「代表的な玉名音調」を持つとする「旧玉名郡石貫村 (現玉名市石貫)」の方言の話者である。また調査協力者のうち二名は石貫に隣接する三ツ川 (旧米富村) で生まれ育ったという。

平山は、玉名音調を持つ方言の代表として旧玉名郡川沿・江田両村 (現熊本県玉名郡和泉町) の方言をあげる⁵。両方言における A 型と B 型の音調型は、(4) のように記述されている (例は平山 1951 にあるものをそのまま用い、音調型の表記は本稿のものに改めた)。

(4) 旧玉名郡川沿・江田両村の方言のアクセント

	A 型		B 型	
	一拍名詞	葉を	[ハ]バ	歯を
二拍名詞	鼻	[ハ]ナ	花	ハナ =
	鼻を	[ハナ]バ	花を	ハナ - バ =
三拍名詞	着物	[キ]モン～キ[モ]ン	油	アブラ =
	着物を	キ[モ]ン - バ	油を	アブラ - ガ =

平山の記述によれば、(4) で示したとおり A 型に属する三拍名詞の単独発話における実現に関しては、第一拍のみが高い [キ]モン (頭高型) と第二拍のみ高いキ[モ]ン (中高型) とで揺れが見られるという。平山 (1951: 68-70) は、語によって頭高型と中高型のどちらで現れることが多いかは異なるが、中高型で現れることが多い語は語頭拍の母音が無声化しているものがほとんどであると述べる。ただし、「オ[ナ]ゴ (女)」のように、語頭拍の母音が無声化していないものも中高型で現れるとの記述もある。また、三拍名詞 A 型の語は HHL～HML～MHL のような音調型で現れることもある。さらには、一部の A 型の語 (カツオ (鰹)、コーリ (氷)、マツリ (祭) など) では、助詞が続いた場合でも [カ]ツオ - バのように、ピッチの下降位置が二拍目の後に移動することがないともいう。いずれにしても、A 型は語中に下降があり、B 型は全体的に平板な型と一般化ができるようである。

平山の研究の後、語の長さに関わらず最大3種類のアクセント型が対立する三型アクセントも含めたN型アクセント一般について述べた上野（1984; 2012）の他、西南部九州二型アクセントに関する共時的記述およびその歴史的形成過程についても論じた木部（2000）、長崎方言の二型アクセントについて音響音声学的な分析・音韻論的分析とともに外来語アクセントのあり方なども含めて広く論じた松浦（2014）など、西南部九州二型アクセント方言に関する研究は多く出た。しかし、それらは主に鹿児島市方言を中心とする鹿児島県の諸方言と長崎方言を対象としたものであり、佐賀県の二型アクセント方言や熊本県の二型アクセント方言に関する研究は多くない⁶。

4. 調査の概要

筆者らによる調査は2015年3月6日と7日の二日間、熊本県玉名市内で行われた。調査には筆者らの他、熊本県立大学の小川晋史氏と北星学園大学の松浦年男氏が参加した。

調査項目には様々なものが含まれていたが、本稿で主に用いるのは1～3拍の名詞557語のアクセントに関する調査結果である。これらの調査語を、予め用意をしたフレーム文に挿入し、その文を調査協力者（話者）に読み上げてもらった。フレーム文は、調査語単独の形（フレーム文なし）と、調査語＋一拍助詞＋述語というものであった。調査語の語形は共通語と同じものとし、いわゆる俚諺形の組織的な調査は行っていない。調査語は、金田一（1974）に記載の類別語彙およびそれを改訂した類別語彙表を用いた調査報告である上野（1985）に採録の語彙からアクセント語類の各類に偏りがないように抽出をし、類に属さない語も若干数調査した。話者の情報については（5）のとおりである。

（5）話者情報（話者のID、性別・生年、居住地および出生地）

KK	男性・1935（S10）年生	居住地・出生地ともに <u>三ツ川</u>
KH	男性・1940（S15）年生	居住地・出生地ともに <u>三ツ川</u>
OM	女性・1929（S4）年生	居住地・出生地ともに <u>石貫</u>
AJ	男性・1941（S16）年生	亀甲に居住・岩崎で出生

我々の観察では（5）の話者のうちAJ氏は非弁別的なアクセント体系を持つと考えられるゆえ⁷、以下では、三ツ川出身のKK氏・KH氏および石貫出身のOM氏のデータをもとにして、玉名市方言アクセントの記述を行うこととする。

5. 玉名市方言アクセントの概略

アクセント型の判定は、聴覚印象および基本周波数曲線の視認に基づいて行った。同一の語が、すべての話者で同一の音調型で実現するとも限らず、また同じ話者の中でも揺れることがある。しかしながら玉名市方言アクセントは二型アクセントの体系であると言って良いと考えられる。三名の話者の発音において観察された音調型は以下のとおりである⁸。

(6) 玉名市方言アクセント (話者別・一拍～三拍)

KK 氏 (三ツ川出身・男性・S10 年生)

	A 型		B 型	
一拍名詞	葉	[ハ		
	葉が	[ハ]-ノ		
二拍名詞	鼻	[ハ]ナ	花	ハ[ナ
	鼻が	[ハ]ナ-ノ	花を	ハ[ナ]-バ
			息	[イ]キ
			息を	イ[キ]-バ
三拍名詞	鯛	[イ]ワシ	頭	ア[タ]マ
	鯛を	[イ]ワシ-バ	頭を	ア[タマ]-バ
	力	[チカ]ラ	枕	マ[クラ
	力が	[チカ]ラ-ノ	枕を	マ[クラ]-バ

KH 氏 (三ツ川出身・男性・S15 年生)

	A 型		B 型	
一拍名詞	葉	[ハ		
	葉が	[ハ]-ノ		
二拍名詞	鼻	[ハ]ナ	花	ハ[ナ
	鼻が	[ハ]ナ-ノ	花を	ハ[ナ]-バ
	袖	[ソ]デ	糸	イ[ト
	袖を	[ソ]デ-バ～ソ[デ]-バ	糸を	イ[ト]-バ
三拍名詞	鯛	[イ]ワシ	頭	ア[タマ
	鯛を	[イ]ワシ-バ	頭を	ア[タマ]-バ
	二人	[フタ]リ	長さ	[ナガサ
	二人で	[フタ]リ-デ	長さが	[ナガサ]-ノ
	蜥蜴	ト[カ]ゲ		
	蜥蜴を	ト[カ]ゲ-バ		

OM 氏 (石貫出身・女性・S4 年生)

	A 型		B 型	
一拍名詞	葉	[ハ		
	葉が	[ハ]-ノ		
二拍名詞	鼻	[ハ]ナ	花	ハ[ナ
	鼻が	[ハ]ナ-ノ	花を	ハ[ナ]-バ
	風	[カ]ゼ	糸	イ[ト
	風が	カ[ゼ]-ノ	糸を	イ[ト]-バ～[イト]-バ
三拍名詞	鯛	[イ]ワシ	頭	ア[タマ
	鯛を	[イ]ワシ-バ	頭を	ア[タマ]-バ

三拍名詞	息子	[ムス]コ	漆	[ウルシ
	息子を	[ムス]コ-バ	漆を	[ウルシ]バ
	心	[コ]コロ		
	心が	コ[コ]ロ-ノ		

(7) 玉名市方言アクセント (四拍以上)

		A 型		B 型	
四拍名詞	KK	[デ]ッサン	[デ]ッサン-バ	ス[ボン]ジ	ス[ボンジ]-バ
	KH	[デ]ッサン	[デ]ッサン-バ	ス[ボンジ	ス[ボンジ]-バ
	OM	[デッサ]ン	[デッサ]ン-バ	ス[ボンジ	ス[ボンジ]-バ
	KK	[モ]スクワ	[モ]スクワ-ニ	ブ[ラジル	ブ[ラジル]-ニ
	KH	[モ]スクワ	[モ]スクワ-ニ	ブ[ラジル	ブ[ラジル]-ニ
	OM	[モ]スクワ	[モス]クワ-ニ	ブ[ラジル	ブ[ラジル]-ニ
五拍名詞	KK	[ブ]ーメラン	[ブ]ーメラン-バ	ナ[ボレオ]ン	ナ[ボレオン]-バ
	KH	[ブ]ーメラン	[ブ]ーメラン-バ	ナ[ボレオ]ン	ナ[ボレオン]-バ
	OM	[ブ]ーメラン	[ブ]ーメラン-バ	ナ[ボレオ]ン	ナ[ボレオン]-バ
	KK			[ランドセル	[ランドセル]-バ
	KH			[ランドセル	[ランドセル]-バ
	OM			[ランドセル	[ランドセル]-バ
六拍名詞	KK	[パ]ンフレット	[パ]ンフレット-バ	[アンサンプ]ル	[アンサンプル]-バ
	KH	[パ]ンフレット	[パ]ンフレット-バ	[アンサンプ]ル	[アンサンプル]-バ
	OM	[パ]ンフレット	[パ]ンフレット-バ	[アンサンプ]ル	[アンサンプル]-バ

実現する音調型には個人差が認められるが、全ての話者に共通する特徴は (8) のように一般化できる。

- (8) A 型の語は、どのような環境にあっても基本的に一拍目もしくは二拍目の後でピッチの下降が生じる一方で、B 型の語はピッチの下降がないか、あるいは文節の後ろから二番目の拍の後にピッチの下降がある。

また、三名の話者に共通して一拍名詞においてはアクセント型の区別がない。以下では、二拍以上の名詞における A 型・B 型それぞれの語の音調実現について、話者ごとに見ていくことにする。

5.1 話者 KK 氏の場合

(8) の一般化が最も当てはまるのは KK 氏の場合 (特に三拍以上の語の場合) である。KK 氏の場合、二拍名詞 A 型は常に頭高型で実現する一方、二拍名詞 B 型の語は上昇も下降もない平板な音調、もしくは一拍目から二拍目にかけてピッチがやや上昇する形で実現する。ただし、B 型の語

は（一拍の）助詞が続くとその助詞は語末拍のピッチよりも低く実現する。また、B型の語が単独で発音される時、その二拍目の母音が狭母音であれば頭高型で実現することがある⁹。

三拍名詞 A型の語は一拍目もしくは二拍目の後でピッチの下降が見られ、それは助詞が続いても変わらない。一方、三拍名詞 B型の語は、単独発話ではほとんどの場合二拍目の後でピッチの下降が見られるが、助詞が続いた場合にはア[タマ]-バのように語末拍から続く助詞にかけてピッチの下降を伴う形をとる。これは四拍以上の名詞の場合でも同様である。したがって三拍以上のB型の名詞の音調型は、（助詞の有無に関係なく）文節の次末拍から末尾拍にかけてピッチの下降を伴うと一般化できる。なお、A型・B型いずれのアクセント型においても、語頭のピッチの高低昇降は弁別的ではない。

KK氏のアクセントにおいては、二拍名詞B型の語で二拍目に狭い母音を含んでいる場合に単独発話において頭高型で実現することがあり、A型の語との区別が不明瞭となることがある。また、三拍名詞が単独で発話され、二拍目の後にピッチの下降を伴って現れたとき、ただちにそれがA型に属するのかB型に属するのかを判断できない（語頭のピッチの高低昇降が弁別的ではないことにも注意）。しかし、これ以外の環境ではA型とB型の区別が不明瞭になる（中和する）ことはない。以上より、KK氏のアクセントは明瞭な二型アクセント体系であると言える。

(9) KK氏の二型アクセント

- a. 二拍名詞の場合、A型は頭高型である一方、B型は単独発話で平板型、助詞が続くと語末拍から続く助詞にかけてピッチの下降を伴う型となる（希にB型は助詞が続いても平板型で現れる）。
- b. 三拍以上の場合、A型は一拍目もしくは二拍目の後でピッチの下降を伴う型であり、B型は（助詞の有無に関係なく）文節の次末拍から末尾拍にかけてピッチの下降を伴う型となる。

5.2 話者KH氏・OM氏の場合

KH氏もOM氏も、二拍名詞A型の語が単独発話時に頭高型で現れることはKK氏と変わらない。ただ、助詞が続いた際の音調型はKK氏のそれと異なることがある。つまり、ピッチの下降位置が二拍目の後に移動する現象がしばしば見られるのである。また、三拍以上のA型の語は基本的に一拍目か二拍目の後にピッチの下降を伴う形で現れる。このうち単独発話時に一拍目の後にピッチの下降を伴うものは、フレーム文中に入って助詞が続くとピッチの下降位置が二拍目の後に移動することがある。このピッチの下降位置が後ろにずれる現象はOM氏の場合に特に顕著に見られる。しかし、OM氏もKH氏も（KK氏も）四拍以上になるとフレーム文中であっても単独発話であってもある程度安定して一拍目もしくは二拍目の後でピッチが下降する形で実現する。

なお、語頭の高さに関して言えば、平山が玉名音調の三拍名詞A型の一部がHHL～HML～MHLのような形式で現れることがあると述べているのはKH氏・OM氏の場合にもあてはまる。A型は「（語頭に近い位置に）ピッチの下降がある」ということが弁別的なのであって、出だしのピッチの高低は弁別的ではないと考えられる。

さて、KH氏とOM氏のアクセントと、KK氏のアクセントの違いとして最も大きなものは三拍名詞B型の実現のあり方であろう。既に述べたとおりKK氏のアクセントでは、B型の語は（助詞が続くかどうかに関係なく）文節が三拍以上であれば次末拍から末尾拍にかけてピッチの下降が見られる。それに対して、KH・OM両氏のアクセントでは、三拍名詞B型の語は単独発話時に下降を伴わず、助詞が続くとその助詞が語末拍のピッチよりも低い音調で実現する。しかしながら当該の個人差は、四拍以上のB型の語では観察されない。この条件下では、すべての話者のアクセントにおいて（助詞が続くかどうかに関係なく）文節の次末拍から末尾拍にかけてピッチの下降が見られる。なお、B型においても出だしのピッチの高低は弁別的ではない。KH氏・OM氏の場合、二拍名詞・三拍名詞ともにB型であれば、MH(H)～LH(H)～HH(H)のどの音調型でも実現しうる。

KH氏およびOM氏の場合、二拍名詞A型の語の一部が文中で○○]・○と二拍目の後でピッチの下降を伴う型で現れることがある一方、二拍名詞B型の多くも文中で○○]・○という型で現れる。つまり、ある二拍名詞が文中で○○]・○という二拍目の後でピッチの下降を伴う型で現れた場合に、それがA型の語であるのかB型の語であるのかをただちに判断できないのである。しかしながら、これ以外の環境においてはA型とB型の区別は明瞭である。KH氏もOM氏も、KK氏と同様に明瞭な二型アクセント体系を持っていると考えられる。

(10) KH氏とOM氏の二型アクセント

- a. 二拍・三拍名詞の場合、A型の語は語中にピッチの下降がある一方、B型の語は語中にピッチの下降がない。
- b. 四拍以上の場合、A型の語は基本的に一拍目あるいは二拍目の後でピッチの下降を伴う一方、B型の語は基本的に文節の次末拍から末尾拍にかけてピッチの下降を伴う。

5.3 本節のまとめ

本節で示したように、玉名市方言のアクセント型には個人差が認められ、また同一話者内での音調型のゆれが認められる。また、特定の環境においては、音調型の揺れのために、アクセント型の区別が不明瞭になる（あるいは中和する）ことがある。しかしながら、大部分の環境においてはアクセント型の区別が観察されることと、3種類以上の対立するアクセント型を認める証拠がない（対立数は最大2である）ことから、玉名市方言のアクセント体系は、先行研究の記述のとおり、A型とB型が対立する二型アクセントであると結論することができる。また、付録に示した通り、A型とB型の分布が、話者間である程度一致する事実は、玉名市方言が二型アクセント体系を持つとする見解を支持する。

観察された個人差が、世代差あるいは方言差（地域差）に起因する可能性を探求するのは今後の課題である。このことは次節でも触れる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、まず先行研究について述べた後（3節）、我々が行った玉名市方言アクセント調査の概要を示した（4節）。そして、5節において話者間の相違にも言及しながら玉名市方言アクセントの

概略を記述し、玉名市方言のアクセントが先行研究の指摘どおり二型アクセント体系であることを示した。

我々の行った調査は基本的に歴史的研究を視野に入れたものであり、類別語彙を中心とした1～3拍名詞ばかりが対象であった。それ故、未だ玉名市方言アクセントの細部について明らかでないことが多く残っている。特に問題となるのは、三拍名詞B型における単独発話時のKK氏とKH・OM両氏の発音の違いであろう。

今のところ筆者らは、平山(1951)の記述や周辺の二型アクセントに関する記述を参考にして、B型は下降を伴わないのが本来であると仮定し、特にKK氏の発話において顕著に観察されたB型の単独発話時に見られる下降の実現は「接続形」か「言い切り形」かの違い(上野1989;Uwano 2012)に相当するようなある種のイントネーションによるものではないかと考えている。あるいは、KH・OM両氏の三拍名詞B型の語の単独発話時に現れる「下降のない」音調型の方を何らかのイントネーションが被さったものとすることも考えられる。

もう一つ考えるべきことは、三拍までの名詞においては単独発話時に下降を伴わない型で実現することがほとんどだったKH氏・OM氏であっても、四拍以上の名詞では単独発話時でも次末拍から語末拍にかけて下降を伴うことが多くなったということである。この事実を単純に解釈すれば、語が長くなるにつれてB型の語は単独発話時でも次末拍の後でピッチの下降を伴いやすくなるということになる。また、今回データとして用いた四拍以上の語が主に外来語であったことも関係している可能性もある。その他、考慮すべき事柄は多い。

本稿では、今手元にあるデータをもとにして考えられることを述べたが、これまでの調査で得られたデータとそれに対する分析は必ずしも十分ではなく、今後さらにデータを拡充し、音響音声学的な分析も含めた詳しい分析・考察をしていく必要がある。近く再調査をした上で、改めて報告をしたい。

[追記]

筆者らとともに調査を行ってくださった松浦年男氏と小川晋史氏に深く感謝申し上げます。また、調査に協力してくださった話者の皆様には筆者らの調査に快く応じていただき、心より感謝申し上げます。玉名市立歴史博物館ころろピアの皆様には、調査協力者のご紹介や調査場所の提供など調査に際して様々な便宜をはかっていただいた。記して感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS平成26年度科学研究費補助金(特別研究員研究奨励費)「九州北部と出雲地域諸方言を中心とした外輪式アクセントの史的的位置づけに関する研究」(課題番号14J03096、研究代表者:平子達也)および同(若手(B))「アクセント体系と形態統語論における改新に基づいた九州諸方言の系統関係の解明」(課題番号26770143、研究代表者:五十嵐陽介)の研究成果の一部である。

参考文献

- 荒河翼 (2013) 「種子島伊関浜脇方言の二型アクセント体系」『第 27 回日本音声学会全国大会予稿集』 89-94.
- 荒河翼 (2014) 「種子島西之表方言におけるアルファベット関連語彙のアクセント」『ニダバ』 44 : 60-69.
- 五十嵐陽介・平子達也 (2014) 「佐賀県北方町周辺方言における 3 拍 5 類の対応がアクセントの歴史研究に与える示唆」第 149 回日本言語学会 (11 月 15 日愛媛大学) 口頭発表.
- 五十嵐陽介・松浦年男 (2015) 「天草諸方言のアクセント資料の提示と新しいアプローチに基づいた西南部九州諸方言の系統分析の試み」『九州大学言語学論集』 35 : 71-102.
- 上野善道 (1984) 「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題 2 記述的研究篇』明治書院 : 167-209.
- 上野善道 (1985) 「村上方言の名詞のアクセント資料 - 1 ~ 3 モーラ語」『東京大学言語学論集』 25-60.
- 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント」『講座 日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻』(上) 明治書院 : 178-205.
- 上野善道 (2012) 「N 型アクセントとは何か」『音声研究』 16 (1) : 44-62.
- 上村孝二 (1971) 「天草島方言のアクセント」『鹿児島大学法文学部紀要 : 文学科論集』 7 : 95-113.
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.
- 木部暢子 (2011) 「天草市本渡方言のアクセント : 動詞句のアクセント」『国立国語研究所論集』 2 : 49-76.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的・原理と方法』塙書房.
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』学界之指針社.
- 松浦年男 (2014) 『長崎方言からみた語音調の構造』ひつじ書房.
- Uwano, Zendo (2012) 'Three types of accent kernels in Japanese.', *Lingua*. 122: 1415-1440.

注

- 1 例えば、熊本県天草諸方言のアクセントに関しては上村（1972）の他、木部（2011）や五十嵐・松浦（2015）などある程度の研究の蓄積がある。種子島諸方言のアクセントについても近年、荒河（2013; 2014）が出た。
- 2 文献資料に反映されたものも含めた日本語本土諸方言アクセントの対応にもとづき、日本本土諸方言アクセントの祖体系に再建されるアクセント型によって区別されるグループのことを「類（アクセント語類）」と呼ぶ。また、それぞれのアクセント語類に所属する語彙のことを「類別語彙」と呼び、各類は二拍1類・二拍2類など番号で呼ばれる。本稿では、広く用いられている金田一（1974）の類および類別語彙を一部改訂した上野（1985）の示す類・類別語彙を用いる。名称も上野（1985）に従う。
- 3 末尾の＝は、その語・文節が全体に（高くも低くもなく）平板な音調で実現することを示す。
- 4 鹿児島方言と長崎方言の大きな違いとして、韻律上の数える単位が音節であるのか拍であるのか、という違いがある（木部 2000; 松浦 2104 など）。
- 5 両村ともに地理的には石貫・三ツ川のやや（北）東に位置する。
- 6 佐賀県諸方言のアクセントについては五十嵐・平子（2014）がある。五十嵐・平子（2014）で扱った佐賀県旧杵島郡および旧藤津郡の諸方言における二型アクセントに関する報告は別途準備中である。
- 7 AJ氏の出生地は玉名市岩崎であり、石貫や三ツ川に比べて市の南部に位置する。平山（1951: 64-65）では、旧玉名郡の中でも熊本市に近い南（東）部では非弁別的な一型アクセントとなっていると述べられている。AJ氏のアクセントが非弁別的な体系となっていることが地理的な要因によるのかは定かではないが、いずれにしても二型アクセントが一型化（あるいは無型化）していく過程を解明する上でAJ氏のアクセントは興味深いものである。
- 8 本文中で詳述するが、(6) (7) に示したのはあくまで各話者における各アクセント型の語が実現する代表的な音調型であって、これ以外の音調型が全く許されないということではない。
- 9 この二拍名詞B型が頭高型で実現する現象は、二拍目の母音が狭ければ必ず起きるわけでもないが、特に二拍目の母音が無声化する場合には規則的に起こるようである。また、二拍目の母音が狭くなくても単独発話時に頭高型で実現するものも希にあった。

付録

- ・1～3拍の調査語 562 語について拍・類順に並べて、各話者の発音におけるアクセント型を示す（ほとんどが名詞だが 355「先ず」356「若し」などの副詞や 536「赤か」539「旨か」548「長か」といった形容詞も含まれる）。
- ・類の欄の「x」は、上野（1985）が所属語彙不明とするもの。類の欄が空欄のものは上野の表に含まれていないもの。
- ・アクセント型は A もしくは B で表わした。A/B としているものは、一度目の発話では A 型で実現したが、二度目の発話では B 型で実現したことを示す。

	単 語	拍	類	KK 氏	KH 氏	OM 氏
1	緒 (オ)	1	1	-	-	-
2	蚊 (カ)	1	1	-	-	-
3	血 (チ)	1	1	-	-	-
4	戸 (ト)	1	1	-	-	-
5	帆 (ホ)	1	1	-	-	-
6	名 (ナ)	1	2	-	-	-
7	葉 (ハ)	1	2	-	-	-
8	日 (ヒ)	1	2	-	-	-
9	藻 (モ)	1	2	-	-	-
10	絵 (エ)	1	3	-	-	-
11	尾 (オ)	1	3	-	-	-
12	木 (キ)	1	3	-	-	-
13	酢 (ス)	1	3	-	-	-
14	田 (タ)	1	3	-	-	-
15	手 (テ)	1	3	-	-	-
16	菜 (ナ)	1	3	-	-	-
17	荷 (ニ)	1	3	-	-	-
18	根 (ネ)	1	3	-	-	-
19	火 (ヒ)	1	3	-	-	-
20	屁 (ヘ)	1	3	-	-	-
21	穂 (ホ)	1	3	-	-	-
22	箕 (ミ)	1	3	-	-	-
23	芽 (メ)	1	3	-	-	-
24	目 (メ)	1	3	-	-	-
25	湯 (ユ)	1	3	-	-	-
26	輪 (ワ)	1	3	-	-	-
27	餌 (エ)	1	x	-	-	-
28	毛 (ケ)	1	x	-	-	-
29	痔 (ジ)	1	x	-	-	-
30	巢 (ス)	1	x	-	-	-
31	背 (セ)	1	x	-	-	-
32	齒 (ハ)	1	x	-	-	-
33	胃 (イ)	1		-	-	-
34	茶 (チャ)	1		-	-	-
35	姉 (アネ)	2	1	B	B	B
36	飴 (アメ)	2	1	A	A	A
37	蟻 (アリ)	2	1	B	B	A
38	烏賊 (イカ)	2	1	A	B	B
39	魚 (ウオ)	2	1	A	A	A
40	牛 (ウシ)	2	1	A	A	A

	単語	拍	類	KK氏	KH氏	OM氏
41	梅 (ウメ)	2	1	A	B	A
42	枝 (エダ)	2	1	A	A	A
43	海老 (エビ)	2	1	A	A	A
44	甥 (オイ)	2	1	B	A	A
45	丘 (オカ)	2	1	B	A	A
46	顔 (カオ)	2	1	B	B	A
47	柿 (カキ)	2	1	B	A	B/A
48	籠 (カゴ)	2	1	B	A	A
49	風 (カゼ)	2	1	A	A	A
50	蟹 (カニ)	2	1	A	A	B/A
51	金 (カネ)	2	1	A	B	B
52	鐘 (カネ)	2	1	A	B	A
53	株 (カブ)	2	1	A	A	B
54	壁 (カベ)	2	1	B/A	A	B
55	釜 (カマ)	2	1	A	A	A
56	蚊帳 (カヤ)	2	1	A	A	B
57	粥 (カユ)	2	1	A	A	A
58	雉 (キジ)	2	1	A	B/A	A
59	傷 (キズ)	2	1	A	A	A
60	桐 (キリ)	2	1	B	B/A	A
61	霧 (キリ)	2	1	B	B	A
62	釘 (クギ)	2	1	A	A	A
63	口 (クチ)	2	1	A	A	A
64	首 (クビ)	2	1	A	B	A
65	鋏 (クワ)	2	1	B	A	B
66	腰 (コシ)	2	1	A	A	A
67	駒 (コマ)	2	1	A	A	B
68	胡麻 (ゴマ)	2	1	B	B	B
69	此れ (コレ)	2	1	A	B	B
70	先 (サキ)	2	1	A	A	A
71	酒 (サケ)	2	1	A	A	A
72	笹 (ササ)	2	1	B/A	A	A
73	里 (サト)	2	1	B	A	B
74	鯖 (サバ)	2	1	A	A	B
75	皿 (サラ)	2	1	A	A	A
76	芝 (シバ)	2	1	B	A	A
77	城 (シロ)	2	1	A	A	B
78	皺 (シワ)	2	1	A	A	A
79	末 (スエ)	2	1	A	A	A
80	鋤 (スキ)	2	1	B	B/A	A
81	杉 (スギ)	2	1	A	A	A
82	裾 (スソ)	2	1	A	B/A	A
83	底 (ソコ)	2	1	A	B/A	A
84	袖 (ソデ)	2	1	A	A/B	A
85	其れ (ソレ)	2	1	B	A	B
86	滝 (タキ)	2	1	B	A	A
87	竹 (タケ)	2	1	B	A	B
88	棚 (タナ)	2	1	A	A/B	A
89	誰 (ダレ)	2	1	B	B	B
90	壺 (ツボ)	2	1	A	B	B
91	爪 (ツメ)	2	1	A	A	A
92	釣り (ツリ)	2	1	A	B/A	A
93	何処 (ドコ)	2	1	B	A	A

平子・五十嵐：熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告

	単語	拍	類	KK氏	KH氏	OM氏
94	虎 (トラ)	2	1	A	A	A
95	鳥 (トリ)	2	1	A	A	A
96	西 (ニシ)	2	1	A	A	A
97	軒 (ノキ)	2	1	A	B	A
98	灰 (ハイ)	2	1	A	A	A
99	蠅 (ハエ)	2	1	B	B	B
100	箱 (ハコ)	2	1	A	A	B
101	端 (ハシ)	2	1	A	B	B/A
102	蓮 (ハス)	2	1	A	A	B
103	蜂 (ハチ)	2	1	A	A	B
104	鼻 (ハナ)	2	1	A	A	A
105	羽根 (ハネ)	2	1	A/B	B/A	A
106	稗 (ヒエ)	2	1	A	A	A
107	髭 (ヒゲ)	2	1	A	A	B
108	膝 (ヒザ)	2	1	A	A	A
109	暇 (ヒマ)	2	1	B	B	B
110	紐 (ヒモ)	2	1	A	A	A
111	鱭 (ヒレ)	2	1	B	B	B
112	笛 (フエ)	2	1	A	A	B
113	藤 (フジ)	2	1	A	A	A
114	蓋 (フタ)	2	1	A	A	B
115	筆 (フデ)	2	1	A	A	B
116	臍 (ヘソ)	2	1	A	A	A
117	星 (ホシ)	2	1	A	A	A
118	真似 (マネ)	2	1	A	B	A
119	右 (ミギ)	2	1	A	B	A
120	水 (ミズ)	2	1	A	A	A
121	道 (ミチ)	2	1	B	B/A	B
122	虫 (ムシ)	2	1	A	A	A
123	棟 (ムネ)	2	1	B	A	A
124	糊 (モミ)	2	1	A	B/A	A
125	桃 (モモ)	2	1	A	B	A
126	森 (モリ)	2	1	B	A	B
127	藪 (ヤブ)	2	1	B	B	B
128	百合 (ユリ)	2	1	A	A	A
129	横 (ヨコ)	2	1	B	A	A
130	嫁 (ヨメ)	2	1	B	B	B
131	鰯 (アジ)	2	2	A	A	A
132	あれ (アレ)	2	2	B	B	B
133	石 (イシ)	2	2	A	A	A
134	岩 (イワ)	2	2	A	A	A
135	歌 (ウタ)	2	2	A	B	B
136	音 (オト)	2	2	A	B	A
137	垣 (カキ)	2	2	A	A	B
138	門 (カド)	2	2	B	B	A
139	紙 (カミ)	2	2	A	A	A
140	川 (カワ)	2	2	A	A	A
141	北 (キタ)	2	2	A	A	B
142	牙 (キバ)	2	2	B	B	B
143	杭 (クイ)	2	2	B	A	A
144	串 (クシ)	2	2	B	B	A
145	鞍 (クラ)	2	2	A	A	A
146	下 (シモ)	2	2	A	B	A

	単語	拍	類	KK氏	KH氏	OM氏
147	蟬 (セミ)	2	2	A	B/A	A
148	旅 (タビ)	2	2	B	A	B
149	塚 (ツカ)	2	2	B	A	A
150	次 (ツギ)	2	2	A	A	A
151	弦 (ツル)	2	2	A	A	A
152	梨 (ナシ)	2	2	A	A	A
153	夏 (ナツ)	2	2	B	A	A
154	虹 (ニジ)	2	2	A	A	A
155	橋 (ハシ)	2	2	A	A	A
156	肘 (ヒジ)	2	2	A	A	A
157	人 (ヒト)	2	2	A	B	B
158	姫 (ヒメ)	2	2	B/A	A	A
159	昼 (ヒル)	2	2	A	B/A	A
160	冬 (フユ)	2	2	A	A	A
161	町 (マチ)	2	2	B	A	A
162	胸 (ムネ)	2	2	A	B	A
163	村 (ムラ)	2	2	B	A	B
164	雪 (ユキ)	2	2	B	B	B
165	垢 (アカ)	2	3	B	B	B
166	麻 (アサ)	2	3	A	B	B
167	足 (アシ)	2	3	B	B	B
168	穴 (アナ)	2	3	B	B	B
169	網 (アミ)	2	3	B	B	B
170	泡 (アワ)	2	3	B	B	B
171	家 (イエ)	2	3	B	B	B
172	池 (イケ)	2	3	B	B	B
173	犬 (イヌ)	2	3	A	B	B
174	芋 (イモ)	2	3	B	B	B
175	色 (イロ)	2	3	B	B	B
176	蛆 (ウジ)	2	3	B	B	B
177	腕 (ウデ)	2	3	B	B	B
178	畝 (ウネ)	2	3	B	B	B
179	馬 (ウマ)	2	3	B	B	B
180	膿 (ウミ)	2	3	B	B	A
181	裏 (ウラ)	2	3	B	B	B
182	親 (オヤ)	2	3	B	B	B
183	貝 (カイ)	2	3	B	A	A
184	鍵 (カギ)	2	3	B	B	A
185	神 (カミ)	2	3	A	B	A
186	髪 (カミ)	2	3	A	B	A
187	瓶 (カメ)	2	3	B	B	B
188	革 (カワ)	2	3	B	B	B
189	皮 (カワ)	2	3	B	B	B
190	菊 (キク)	2	3	B	B	B
191	岸 (キシ)	2	3	B	A	B
192	茎 (クキ)	2	3	B	A	B
193	草 (クサ)	2	3	B	B	B
194	櫛 (クシ)	2	3	B	B	B
195	靴 (クツ)	2	3	B	B	B
196	熊 (クマ)	2	3	A	A	A
197	雲 (クモ)	2	3	B	B	A
198	倉 (クラ)	2	3	B	B	B
199	栗 (クリ)	2	3	A	B	A

平子・五十嵐：熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告

	単語	拍	類	KK氏	KH氏	OM氏
200	桑 (クワ)	2	3	B	A	A
201	苔 (コケ)	2	3	B	B	B
202	米 (コメ)	2	3	B	B	B
203	竿 (サオ)	2	3	B	B	B
204	坂 (サカ)	2	3	B	B	B
205	塩 (シオ)	2	3	B	A	B
206	潮 (シオ)	2	3	B	B	B
207	舌 (シタ)	2	3	B	A	A
208	島 (シマ)	2	3	B	B	B
209	霜 (シモ)	2	3	B	B	A
210	尻 (シリ)	2	3	B	B	B
211	鮪 (スシ)	2	3	A	B	A
212	脛 (スネ)	2	3	B/A	B	A
213	炭 (スミ)	2	3	B	B	A
214	墨 (スミ)	2	3	A	B	B
215	芹 (セリ)	2	3	B	A	A
216	鯛 (タイ)	2	3	B	A	A
217	丈 (タケ)	2	3	A	A	B
218	谷 (タニ)	2	3	B	B	B
219	玉 (タマ)	2	3	B	B	B
220	柄 (ツカ)	2	3	B	A	B
221	月 (ツキ)	2	3	B	B	B
222	土 (ツチ)	2	3	B	B	B
223	綱 (ツナ)	2	3	B	B	B
224	角 (ツノ)	2	3	B	B	B
225	時 (トキ)	2	3	B	B	B
226	毒 (ドク)	2	3	B	B	A
227	年 (トシ)	2	3	B	B	B
228	波 (ナミ)	2	3	A	A	B
229	縄 (ナワ)	2	3	B	B	B
230	糠 (ヌカ)	2	3	B	B	B
231	後 (ノチ)	2	3	B	B	B
232	蚤 (ノミ)	2	3	B	A	A
233	海苔 (ノリ)	2	3	B	B	A
234	墓 (ハカ)	2	3	B	B	A
235	鉢 (ハチ)	2	3	B	B	A
236	花 (ハナ)	2	3	A	B	B
237	浜 (ハマ)	2	3	A	B	A
238	腹 (ハラ)	2	3	B	B	B
239	晴れ (ハレ)	2	3	A	A	B
240	節 (フシ)	2	3	B	B	B
241	縁 (フチ)	2	3	B	B	B
242	堀 (ホリ)	2	3	A	B	A
243	孫 (マゴ)	2	3	B	B	B
244	股 (マタ)	2	3	B	B	B
245	豆 (マメ)	2	3	B	B	B
246	鞠 (マリ)	2	3	B	B	B/A
247	店 (ミセ)	2	3	B	B	B
248	耳 (ミミ)	2	3	B	B	B
249	姪 (メイ)	2	3	A	A	A
250	物 (モノ)	2	3	B	B	B
251	脂 (ヤニ)	2	3	B	B	B
252	山 (ヤマ)	2	3	B	B	B

実践女子大学文学部 紀要 第58集

	単語	拍	類	KK氏	KH氏	OM氏
253	指 (ユビ)	2	3	B	B	B
254	夢 (ユメ)	2	3	B	B	B
255	脇 (ワキ)	2	3	B	B	B
256	綿 (ワタ)	2	3	B	B	B
257	跡 (アト)	2	4	A	B	B
258	粟 (アワ)	2	4	B	B	B
259	息 (イキ)	2	4	B	B	B
260	板 (イタ)	2	4	B	B	B
261	市 (イチ)	2	4	B	B	B
262	何時 (イツ)	2	4	B	A	A
263	糸 (イト)	2	4	B	B	B
264	稲 (イネ)	2	4	B	B	B
265	白 (ウス)	2	4	A	B	A
266	海 (ウミ)	2	4	A	A	A
267	瓜 (ウリ)	2	4	B/A	B	B/A
268	帯 (オビ)	2	4	B	B	A
269	笠 (カサ)	2	4	B	B	B
270	肩 (カタ)	2	4	A	A	B
271	角 (カド)	2	4	B	B	B
272	鎌 (カマ)	2	4	B	B	B
273	上 (カミ)	2	4	B	B	A
274	杵 (キネ)	2	4	B	B	B
275	今日 (キョウ)	2	4	A	A	A
276	錐 (キリ)	2	4	B	B	B
277	肩 (クズ)	2	4	B	B	A
278	今朝 (ケサ)	2	4	B	B	B
279	下駄 (ゲタ)	2	4	A	B	A
280	汁 (シル)	2	4	A	B	A
281	隅 (スミ)	2	4	B	B	A
282	銭 (ゼニ)	2	4	B	B	B
283	外 (ソト)	2	4	B	B	B
284	側 (ソバ)	2	4	B	B	B
285	空 (ソラ)	2	4	A	A	A
286	種 (タネ)	2	4	B	B	B
287	乳 (チチ)	2	4	B	B	B
288	父 (チチ)	2	4	B	B	B
289	杖 (ツエ)	2	4	B	B	B
290	槌 (ツチ)	2	4	B	B	B
291	粒 (ツブ)	2	4	A	B	A
292	苗 (ナエ)	2	4	B	B	B
293	中 (ナカ)	2	4	A	B	A
294	何 (ナニ)	2	4	B	B	B
295	箸 (ハシ)	2	4	A	B	B
296	肌 (ハダ)	2	4	B	A	A
297	針 (ハリ)	2	4	A	A	A
298	舟 (フネ)	2	4	B	B	B
299	紅 (ベニ)	2	4	B	B	B
300	松 (マツ)	2	4	B	B	B
301	味噌 (ミンソ)	2	4	B	B	B
302	麦 (ムギ)	2	4	A	B	B
303	罌 (ワナ)	2	4	B	B	B
304	藁 (ワラ)	2	4	B	B	B
305	青 (アオ)	2	5	A	B	B

平子・五十嵐：熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告

	単語	拍	類	KK氏	KH氏	OM氏
306	赤 (アカ)	2	5	B	A	B
307	秋 (アキ)	2	5	A	A	A
308	朝 (アサ)	2	5	B	B	B
309	汗 (アセ)	2	5	A	B	B
310	兄 (アニ)	2	5	B	B	A
311	雨 (アメ)	2	5	A	B	A
312	鮎 (アユ)	2	5	B	B	A
313	井戸 (イド)	2	5	B	B	B
314	桶 (オケ)	2	5	B	B	B
315	牡蠣 (カキ)	2	5	A	A	B
316	蔭 (カゲ)	2	5	B	B	B
317	黍 (キビ)	2	5	A	A	A
318	蜘蛛 (クモ)	2	5	B	B	A
319	黒 (クロ)	2	5	B/A	A	A
320	鯉 (コイ)	2	5	B	A	A
321	声 (コエ)	2	5	B	A	B
322	琴 (コト)	2	5	B	A	A
323	鮭 (サケ)	2	5	A	B	B
324	猿 (サル)	2	5	A	A	B
325	白 (シロ)	2	5	B	A	A
326	縦 (タテ)	2	5	B	B	B
327	足袋 (タビ)	2	5	A	B	B
328	露 (ツユ)	2	5	A	A/B	B
329	鶴 (ツル)	2	5	A	A	A
330	鍋 (ナベ)	2	5	B	B	B
331	春 (ハル)	2	5	A	A	B
332	蛭 (ヒル)	2	5	A	A	A
333	鮒 (フナ)	2	5	A	A	A
334	蛇 (ヘビ)	2	5	B	A	A
335	前 (マエ)	2	5	B	B	B
336	窓 (マド)	2	5	A	B	B
337	繭 (マユ)	2	5	B	B	B
338	婿 (ムコ)	2	5	A	B	B
339	腿 (モモ)	2	5	A	B	B
340	今 (イマ)	2	x	B	B	B
341	上 (ウエ)	2	x	A	A	A
342	うち (ウチ)	2	x	A	B	B
343	沖 (オキ)	2	x	B	A	A
344	奥 (オク)	2	x	A	A	A
345	亀 (カメ)	2	x	B	B	B
346	鴨 (カモ)	2	x	B	A	B
347	此処 (ココ)	2	x	B	B	B
348	下 (シタ)	2	x	A	A	A
349	其処 (ソコ)	2	x	B	B	B
350	蛸 (タコ)	2	x	B	B	B
351	鳩 (ハト)	2	x	B	B	B
352	夜 (ヨル)	2	x	B	A	A
353	枇杷 (ビワ)	2		B	A/B	B
354	骨 (ホネ)	2		B	B	B
355	先ず (マズ)	2		A	A	A
356	若し (モシ)	2		A	A	A
357	餅 (モチ)	2		A	A	B
358	霰 (アラレ)	3	1	A	B	A

	単語	拍	類	KK氏	KH氏	OM氏
359	錨 (イカリ)	3	1	A	B	B
360	田舎 (イナカ)	3	1	A	A	A
361	鰯 (イワシ)	3	1	A	A	A
362	漆 (ウルシ)	3	1	A	B	B
363	踊り (オドリ)	3	1	A	A	A
364	飾り (カザリ)	3	1	A	A	A
365	形 (カタチ)	3	1	A	B/A	A
366	鱈 (カツオ)	3	1	A	A	A
367	河原 (カワラ)	3	1	A	A	B
368	着物 (キモノ)	3	1	A	A	A
369	轡 (クツワ)	3	1	B	B	B
370	位 (クライ)	3	1	B	B	A
371	車 (クルマ)	3	1	A	B/A	A
372	煙 (ケムリ)	3	1	A	B	A
373	仔牛 (コウシ)	3	1	A	A	A
374	麴 (コウジ)	3	1	A	A	B/A
375	氷 (コオリ)	3	1	A	A	A
376	今年 (コトシ)	3	1	A	A	B
377	子供 (コドモ)	3	1	A	A	A
378	魚 (サカナ)	3	1	A	A	A
379	桜 (サクラ)	3	1	A	A	A
380	舅 (シュウト)	3	1	A	A	B
381	障子 (ショウジ)	3	1	A	A/B	B/A
382	薪 (タキギ)	3	1	B	B	B
383	畳 (タタミ)	3	1	A	A	A
384	机 (ツクエ)	3	1	B	B	B
385	隣 (トナリ)	3	1	A	A	A
386	名前 (ナマエ)	3	1	A	A	A
387	寝言 (ネゴト)	3	1	A	A/B	B
388	鼻血 (ハナヂ)	3	1	A	B	A
389	庇 (ヒサシ)	3	1	A	B	A
390	額 (ヒタイ)	3	1	B	B	B
391	日照り (ヒデリ)	3	1	A	B	A
392	埃 (ホコリ)	3	1	A	A	B
393	霰 (ミゾレ)	3	1	B	B	B
394	港 (ミナト)	3	1	A	A	A
395	都 (ミヤコ)	3	1	B	B	B
396	昔 (ムカシ)	3	1	B	A	A
397	息子 (ムスコ)	3	1	A	B	A
398	柳 (ヤナギ)	3	1	A	A	B
399	寡婦 (ヤモメ)	3	1	B	B	A
400	涎 (ヨダレ)	3	1	A	A/B	A
401	小豆 (アズキ)	3	2	A	A	A
402	女 (オンナ)	3	2	A	A	B
403	毛抜き (ケヌキ)	3	2	A	A	A
404	東 (ヒガシ)	3	2	A	A	A
405	二重 (フタエ)	3	2	A	B/A	A
406	二つ (フタツ)	3	2	A	A	A
407	二人 (フタリ)	3	2	A	A	B
408	三つ (ミツツ)	3	2	A	A	B
409	娘 (ムスメ)	3	2	A	B/A	A
410	六つ (ムツツ)	3	2	A	A	A
411	八つ (ヤツツ)	3	2	A	A	B

平子・五十嵐：熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告

	単語	拍	類	KK氏	KH氏	OM氏
412	夕べ (ユウベ)	3	2	A	B	B
413	四つ (ヨッツ)	3	2	A	A	B
414	明日 (アシタ)	3	4	B	B	B
415	頭 (アタマ)	3	4	B	B	B
416	軍 (イクサ)	3	4	B	B	B
417	五日 (イツカ)	3	4	B	B	B
418	団扇 (ウチワ)	3	4	B	B	B
419	扇 (オウギ)	3	4	B	B	B
420	男 (オトコ)	3	4	B	B	B
421	表 (オモテ)	3	4	B	B	B
422	鏡 (カガミ)	3	4	B	B	B
423	刀 (カタナ)	3	4	B	B	B
424	鉈 (カンナ)	3	4	B	B	B
425	昨日 (キノウ)	3	4	B	A	A
426	言葉 (コトバ)	3	4	B	B	B
427	暦 (コヨミ)	3	4	B	B	B
428	境 (サカイ)	3	4	B	B	B
429	白髪 (シラガ)	3	4	B	B	B
430	硯 (スズリ)	3	4	B	B	B
431	宝 (タカラ)	3	4	B	B	B
432	袂 (タモト)	3	4	B	B	B
433	俵 (タワラ)	3	4	B	B	B
434	峠 (トウゲ)	3	4	B	B	B
435	匂い (ニオイ)	3	4	B	B	B
436	袴 (ハカマ)	3	4	B	B	B
437	鋏 (ハサミ)	3	4	B	B	B
438	林 (ハヤシ)	3	4	B	B	B
439	光 (ヒカリ)	3	4	B	B	B
440	袋 (フクロ)	3	4	B	B	B
441	衾 (フスマ)	3	4	B	B	B
442	蓆 (ムシロ)	3	4	B	B	B
443	朝日 (アサヒ)	3	5	B	B	B
444	油 (アブラ)	3	5	B	B	B
445	主 (アルジ)	3	5	A	A	B
446	鰻 (アワビ)	3	5	A	A	A/B
447	哀れ (アワレ)	3	5	A	A	A
448	五つ (イツツ)	3	5	B	B	B
449	従兄弟 (イトコ)	3	5	B	B	B
450	命 (イノチ)	3	5	A	A	A
451	親子 (オヤコ)	3	5	A	B	B
452	神楽 (カグラ)	3	5	A	A	A
453	鱈 (カレイ)	3	5	B	B	A/B
454	瓦 (カワラ)	3	5	B	B	B
455	胡瓜 (キュウリ)	3	5	A	B/A	B
456	心 (ココロ)	3	5	A	A	A
457	柘榴 (ザクロ)	3	5	B/A	B	B
458	姿 (スガタ)	3	5	A	B	B
459	簾 (スダレ)	3	5	B	B	B
460	櫛 (タスキ)	3	5	A	B	B
461	情け (ナサケ)	3	5	A/B	B	B
462	茄子 (ナスビ)	3	5	B	A	A
463	涙 (ナミダ)	3	5	A	A	A
464	錦 (ニシキ)	3	5	B	B	B

	単語	拍	類	KK氏	KH氏	OM氏
465	柱 (ハシラ)	3	5	A	B	B
466	単衣 (ヒトエ)	3	5	B	B	B
467	火箸 (ヒバシ)	3	5	B	A	B
468	箒 (ホウキ)	3	5	A	B	B
469	枕 (マクラ)	3	5	B	B	B
470	眼 (マナコ)	3	5	B	A	A/B
471	紅葉 (モミジ)	3	5	A	B	B
472	山葵 (ワサビ)	3	5	B	A	A/B
473	菖蒲 (アヤメ)	3	6	B	B	B
474	孰れ (イズレ)	3	6	B	B	B
475	兎 (ウサギ)	3	6	B	B	B
476	鰻 (ウナギ)	3	6	B	B	B
477	大人 (オトナ)	3	6	B	B	B
478	蛙 (カエル)	3	6	B	A	B
479	鴉 (カモメ)	3	6	B	B	B
480	狐 (キツネ)	3	6	B	B	B
481	虱 (シラミ)	3	6	B	B	B
482	芒 (ススキ)	3	6	B	B	B
483	雀 (スズメ)	3	6	B	B	B
484	李 (スモモ)	3	6	B	B	B
485	背中 (セナカ)	3	6	B	B	B
486	団子 (ダンゴ)	3	6	B	B	B
487	田圃 (タンボ)	3	6	B	B	B
488	燕 (ツバメ)	3	6	B	B	B
489	長さ (ナガサ)	3	6	B	B	B
490	鼠 (ネズミ)	3	6	B	B	B
491	裸 (ハダカ)	3	6	B	B	B
492	跣 (ハダシ)	3	6	B	A	B
493	左 (ヒダリ)	3	6	B	B	B
494	雲雀 (ヒバリ)	3	6	B	B	B
495	誠 (マコト)	3	6	B	B	B
496	蚯蚓 (ミミズ)	3	6	B	B	B
497	蓬 (ヨモギ)	3	6	B	B	A
498	苺 (イチゴ)	3	7	B	B	B
499	後ろ (ウシロ)	3	7	B	B	B
500	蚕 (カイコ)	3	7	B	B	B
501	兜 (カブト)	3	7	B	B	B
502	辛子 (カラシ)	3	7	A	A	B
503	鯨 (クジラ)	3	7	A	B	B
504	薬 (クスリ)	3	7	A	B	A/B
505	卵 (タマゴ)	3	7	A	B	B
506	便り (タヨリ)	3	7	B	B	B/A
507	盥 (タライ)	3	7	B	A	B
508	千鳥 (チドリ)	3	7	A	A	B
509	椿 (ツバキ)	3	7	B	B	B
510	鉛 (ナマリ)	3	7	B	B	B
511	畠 (ハタケ)	3	7	B	B	B
512	一つ (ヒトツ)	3	7	B	A	A
513	一人 (ヒトリ)	3	7	B	B	B
514	緑 (ミドリ)	3	7	A	A	B
515	病 (ヤマイ)	3	7	B	A	B
516	間 (アイダ)	3	x	A	A	B
517	欠伸 (アクビ)	3	x	B	B	B

平子・五十嵐：熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告

	単語	拍	類	KK氏	KH氏	OM氏
518	貴方 (アナタ)	3	x	A	B	A
519	嵐 (アラシ)	3	x	A	A	B
520	泉 (イズミ)	3	x	B/A	B	A
521	烏 (カラス)	3	x	B	B	B
522	栄螺 (サザエ)	3	x	A	B	B
523	狸 (タヌキ)	3	x	A	A	A/B
524	力 (チカラ)	3	x	A	A	A
525	釣瓶 (ツルベ)	3	x	B	A	A
526	蜥蜴 (トカゲ)	3	x	A	A	A
527	仲間 (ナカマ)	3	x	B	B	B
528	斜 (ナナメ)	3	x	B	B	B
529	二十歳 (ハタチ)	3	x	A	A	A
530	麓 (フモト)	3	x	B	B	B
531	蛍 (ホタル)	3	x	A	B	B
532	南 (ミナミ)	3	x	A	A	A
533	盲 (メクラ)	3	x	B	B	B
534	蕨 (ワラビ)	3	x	B	B	B
535	青葉 (アオバ)	3		B	B	A
536	赤か (アカカ)	3		A	A	B
537	雨戸 (アマド)	3		B	B	B
538	網戸 (アミド)	3		B	B	B
539	旨か (ウマカ)	3		B	B	B
540	家族 (カゾク)	3		B	A	A
541	茸 (キノコ)	3		A	A	B
542	櫛 (ケヤキ)	3		A	A	A
543	胡椒 (コショウ)	3		B	B	A
544	小麦 (コムギ)	3		A	A	A
545	砂糖 (サトウ)	3		B	A	A
546	簀子 (スノコ)	3		B	B	B
547	月夜 (ツキヨ)	3		B	B	B
548	長か (ナガカ)	3		A	B	B
549	菜種 (ナタネ)	3		A	B	B
550	七つ (ナナツ)	3		B	A/B	B
551	花火 (ハナビ)	3		B	B	B
552	檜 (ヒノキ)	3		A	A	B
553	火鉢 (ヒバチ)	3		B	A	B
554	祭 (マツリ)	3		A	A	A
555	蜜柑 (ミカン)	3		B	A	B
556	見事 (ミゴト)	3		B	A	A
557	百足 (ムカデ)	3		A	B	A
558	夫婦 (メオト)	3		B	B	B
559	目方 (メカタ)	3		B	B	B
560	眼鏡 (メガネ)	3		B	B/A	B
561	浴衣 (ユカタ)	3		B	B	B
562	若布 (ワカメ)	3		A	A	B